

原 正 先生を偲んで

理工学部 化学システム創成工学科 教授
塚越 一彦

去る2014年9月3日、原正先生（同志社大学名誉教授、元同志社大学学長）が、くも膜下出血のため亡くされました。90歳でした。8月にご挨拶に伺った折は、奥様もまじえて1時間近く談笑させていただき、お顔の色も良くお元気でした。11月開催の研究室同門会（旧単位反応研究室、現計測分離工学研究室）をご案内すると、「行きます。必ず、行くから。大丈夫」と、ニコニコしながら、応じていただきました。原先生の教えを受けてまたはその教えを引き継ぐなかで卒業していった千数百名の同門生に連絡をし、先生の卒寿をみんなで祝う予定でいた矢先のことでした。天命とは思いつつも、残念でなりません。

亡くなられた当日は、朝から普段通りに庭の手入れをなされていたようです。昼食の声を掛けようと思われたときには、すでに庭に倒れられていたとお聞きしました。原先生は蠟梅（ろうばい）を好んでおられました。美しい蠟梅の花を何度か見せていただきました。この冬も、寒さの中、雪の中、庭には、在りし日の先生のお姿を映すかのように、凜とした気品のある蠟梅の花が、咲いていることと思います。

原先生は、卒業論文、修士論文研究も含めすべての研究において、オリジナリティーを強く求められました。ご自分のアイデアを、学生を集めて話をされることもありました。また、実際の実験結果を重視され、著名な研究者の論文内容よりも学生の実験結果を信用されました。移動するときは大抵早足で、階段も一段飛ばしで上がられることがありました。先生の後ろを学生は小走りについていったものです。学生とともに学ぶ姿勢を一貫しておられました。

原先生は、学問分野はもちろん、大学運営、学会活動に広く貢献されました。工学部長や学生部長を歴任され、京田辺キャンパスを開設した1986年から1989年まで学長を務められました。同じく1989年には日本分析化学会学会賞を受賞されています。ご退職後の2002年には、勲二等瑞宝章を受章されました。

1989年の春、京田辺キャンパスを、原先生と一緒に歩いた日のことを覚えています。先生には、学長職を無事終えられ、大任をはたされた安堵感のようなものが感じられました。植えられた木々も比較的小さく、キャンパスには初々しさが残っていました。当時、工学部（現理工学部）は、まだ今出川キャンパスにありましたが、京田辺キャンパスには、同志社の将来へ向けての若いエネルギーと可能性が感じられました。先生は、いつになくゆっくりと歩を進めていかれ、時々、立ち止まっては、新しいキャンパスを見渡し、あたかも同志社の将来像を思い描かれているかのようなようでした。よく晴れた穏やかでのどかな春の一日でした。

先生と歩いたあの日と呼び起こさせてくれる拙句があります。甚だ恐縮ではありますが、ここに添えさせていただきます。

「先生と ゆっくり歩く ^{つくし}土筆かな」

（1989年春 京田辺キャンパスにて 一彦）
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。